



水稲除草剤試験の邪魔者ジャンボタニシ

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 理事
九州支部長

大隈 光善

昨年の4月から九州支部長を拝命し、11月には水稲除草剤展示圃の成績を取りまとめたが、ジャンボタニシの食害で無除草区の雑草がほとんど無かった圃場が約200カ所中、約1割の20カ所に及んだ。圃場を選定する段階では、このタニシがいないか少ない圃場を選定しているが、灌水経路や大雨での畦越しでの侵入が考えられる。また、除草剤適用性試験を実施している県の試験場や植調試験地などで、ジャンボタニシが生息している圃場では、その被害防止のための苦労は大変なものである。除去したつもりでも、一時的に土中にいたものが、その後田面にはい出てくるものもいるし、大雨の時に試験枠を越えて侵入することもある。とにかく雑草調査が終わるまで気が抜けない。

ジャンボタニシの一般名はスクミリンゴガイ (*Pomacea canaliculata* Lamarck) で、1986年10月に学名、和名が確定した。原産地はアルゼンチン北部やウルグアイとされている。1981年頃から食用販売を目的に養殖業者による大量増殖が始まったが、消費者の嗜好に合わず、放置したことから野生化した。1985年頃から水稲、レンコン、ミズイモ等で被害をもたらすようになり、現在では九州地域を中心に太平洋地帯の暖地、温暖地の水田で広く分布している。

ジャンボタニシの根絶を目指して、水田への侵入が見られ始めた1980年後半、私も地元の生産組合での一掃作戦に参加し、主要な用排水路の水を落とし、1匹も残さないようにこのタニシを拾い、また赤い卵塊をつぶす重労働を数年間継続したが、根絶できるどころか、年々発生面積が拡大していった。その後、このような一掃作戦は見かけなくなった。

ジャンボタニシは水稲の移植後の苗を食べる害虫であるが、雑草も食べるのでうまく利用すると益虫にもなる。私が福岡県の試験場に勤務しているときにこのタニシを雑草の生

物的防除手段として利用する方法を検討し、一定の成果を上げることができた。しかし、この成果を活かすためには田面の均平化が極めて重要で、またきめ細かな水管理も必要なことから大規模経営農家や土日にな主な作業をする兼業農家には難しい。

ジャンボタニシはもともと養殖用に導入されたものだが、食味はどうだろうか。けばけばしい朱色の卵塊をみると、とても食べてみたいという気が起らない。自分も30年来このタニシと付き合い合っているがまだ食べたことがない。我が家の近くには水田に隣接し工業団地があり、そこに諸外国から研修生が来ている。真夏の夕暮れに水田の畔際で懐中電灯を照らし何か物色していたので、何しているのかを訪ねると、このタニシを拾っていた。どうするのかを聞いたところ、食べるといった。食文化の違いだろう。みんながサザエやアサリなどを採るようにこのタニシを拾ってくれたら苗の被害も少なくなるだろうに……。

外来の生物は一時的に増加、繁茂することはあっても、一定期間を過ぎれば、天敵の出現等で一定の密度で生態系の中でバランスをとることが多い。すでに侵入が見られている地域で、これ以上密度が増えることはないだろうと考えられる。もちろん水管理やジャンボタニシ防除法の不手際で苗の被害が出る危険性はあるが、すでにこのタニシと数十年来付き合い合ってきた農家にとって、それほど怖いものではないだろう。苗への被害さえ回避できれば、除草剤散布後の後発生の雑草を食べてくれる。このため、ジャンボタニシが発生している地域では除草剤抵抗性雑草の発生がほとんど見られないこともこのタニシの御利益(?)であるかもしれない。ジャンボタニシと未永く上手に付き合い合っていく以外にないだろう。